

しらしらと
(石川啄木)

しらしらと 氷^{こおり} かがやき 千鳥^{ちどり} なく

釧路^{くしろ}の 海^{うみ}の 冬^{ふゆ}の 月^{つき} かな

解説 啄木が七十日あまり滞在した釧路。釧路に来る前の小樽

日報では、主筆の岩泉江東が独断で思うままに事を処理する態度に対抗し、持ち前の、不満な現状を打ち壊すことから始める性格が出て、雨情と共に社内肅正運動を起こし、江東の追放に成功したが、事務長の小林寅吉から暴力をふるわれたことを契機として退社。たった五ヶ月の小樽滞在であったが、小樽日報社長の白石義郎は啄木の才能を惜しみ、自身が経営する釧路新聞社の入社を勧められ入社したが、釧路新聞社でも同じように編集長と仲違いし退社してしまった。この詩は忘れがたき人というテーマで纏められた中の一首として収められており、北海道時代の回想を詠んだといわれている。

語釈 ※しらしらⅡいかにも白いさま。※千鳥Ⅱ。※氷かがやきⅡ釧路港の海上などにできる円形の氷の蓮葉氷が輝く。※冬の月Ⅱ秋から冬にかけての釧路は、夕日が、夜空に輝く月が美しい街です。

通釈 冬の月が釧路の海を照らし、海岸は流水でおおわれ、氷がしらしらと輝いている。そして千鳥のするどい鳴き声が聞こえてくる。啄木の中の釧路の風景は、蓮葉氷の白さと千鳥の寂しげな鳴き声、暗い海の上の澄んだ空に冴え冴えと浮かぶ月だったのではないだろうか。